

THE CENTER FOR SHIN BUDDHIST STUDIES 親鸞仏教センター通信

2017年3月1日発行

発行者 本多弘之

編集・発行 親鸞仏教センター(真宗大谷派)

〒113-0034 東京都文京区湯島2-19-11

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.higashihonganji.or.jp>

Facebook <http://facebook.com/shinran.bc>

2017.3

第60号

生活の土壌

親鸞仏教センター研究員 中村 玲太

どこまでも続くこの日常生活が厭^{いや}だった。星野源が言うように、「非情な現実を目の当りにしながら、人は淡々と生活を続けなければならない」

(文春文庫『そして生活はつづく』より)。これは厳然たる事実であろう。しかし、ここではないどこかに、生活から離れた何かに依るべき世界があるはず。そんな願望とも妄想ともつかない淡い、危うい思いがここまで自分を動かしてきたように思う。だが、この日常はどこまでもこの日常であり続けてきた――。

鈴木大拙は、1930年ごろに大阪朝日新聞に寄稿した「禅僧生活」(講談社学術文庫『一禅者の思索』所収)に、「普通一般の生活というのは広く見ればいわゆる経済・政治・軍事上の経営及びその実行である。個人的にいえば力と利と名との飽くなき逐求である」としたうえで、禅僧の生活とはここからの転換をなす「普通にいう意味の實際生活の否定」だとする。そして、「禅生活は何故にそんな否定をするのか」というに、この否定がないと人間は現実以上に出られないからである。禅生活は禅者だけがやるのでなくて、つまり人間全体の要求を反映したものに過ぎない」と。

確かに、「力と利と名との飽くなき逐求」のところに積み上げられた社会的ステータス、生活水準、家庭等にしても、それらが自己の帰すべき依り処、あるいは自己を言い表すものとはなりえな

いならば、それらを人間生活の全意義だと考えてはならないであろう。もっと確固たる帰すべきものとは何か。繰り返される途方もない日常のなかで、それを超えた何かがあることを示してほしい――こうした祈りにも似た要求が人間の根底に流れている。

しかし、「現実以上に出」るとはどういうことなのであろうか。はたして煩惱しか見当たらない煩惱具足の凡夫が、この現実以上に出られるかは難問である。どこに行こうとも、どんな出世間的な世界だけを見つめようとしても、この現実、日常の形式から免れることはできないのではないか。煩惱具足であると自己を信知するということは、生きつく世界はこの現実しかないことと表裏一体だと考える。

とは言え、この世界はやはり虚妄でしかない。そんな世界を否定しながら、しかしここを否定しえないという思い。この矛盾した思いは、論脈は違うが加藤秀一の表現を借りれば、「それが人間を成り立たせるような絶対的な条件としての矛盾」(『親鸞仏教センター通信』60号5面)と言えるものであり、根源から呼びおこされるどちらの思いからも決して目を背けてはならないように思う。その両極を行ったり来たりすることが、人間の日常生活を支えるものなのかもしれない。

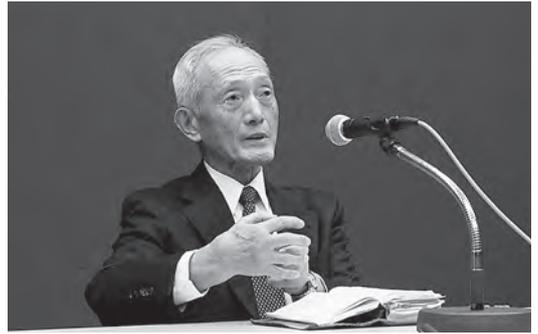
親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③9

諸仏の称歎の意味について

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第95回から97回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、95回と96回では「諸仏如来」について、97回では「東方偈」について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、95回と96回から一部を紹介する。

（親鸞仏教センター嘱託研究員 越部良一）

■ 諸仏の特殊性を超えていく

「無量寿仏の威神極まりなし。十方世界の無量無辺不可思議の諸仏如来、彼を称歎せざることなし」（『真宗聖典』46頁、東本願寺出版、以下『聖典』）とされています。先立って仏法の道に触れ、道を求め、道を明らかにした方々、その人たちの言葉が諸仏の言葉になるわけです。そのような諸仏に対して、無量寿仏、阿弥陀仏という名前が出てくる。これは光が無限でありたい、寿が無限でありたいという、そういう限定されないことのない世界を開こうという願いが名前として付いた仏陀です。なぜ、そういう名前が出てきて、そして諸仏に称歎されるのか。

それは、もともと個人であった方が仏陀に成った場合には、^{きよ}覚りを開いて^{とら}囚われから解放されたといっても、ある意味で特殊性がある。それぞれの仏陀のもつ特殊な力とか特殊な意味があり、例えば薬師如来という名前は、衆生の苦悩のなかでも特に病気を治したいという願いが仏陀の名前に

なっています。また、歴史上の人物が、教えを主体化して、自分自身を発見し苦悩を乗り越えた場合に仏陀という意味をもつならば、それは諸仏の一人になって、そして、この道がこのようにして明るみをもつことができますよと語っていくことができます。けれど、どうしても個人性は克服できないのです。

これは譬えで、私の師匠であった安田理深という方は、たくさん弟子ができたのですが、やはりそれはある意味で一部なのです。「安田さんの言うことはさっぱりわからん。難しすぎる」と寄りつかない人が圧倒的に多かった。そういう人にとってはうるさいだけで、彼の考えは駄目だと。だから、教えを聞くについても因縁なのです。偉い学者さんが、曾我量深の言うことはさっぱりわからんと、金子大築の言うことなら許すと、そのようなことはあるのです。

そのような意味で言えば、諸仏には諸仏各々が得意とする出遇い^あい方があるし、諸仏が一人おられればそこには必ず縁を結ぶ衆生がいるのですが、そうした縁はどれだけ頑張ってもそんなに多くはならないのです。ところが、阿弥陀仏の場合は、親鸞の和讃に「弥陀初会^{しよえ}の聖衆^{しようじゆ}は算数^{さんじゆ}のおよぶことぞなき」（『聖典』480頁）とあるように、「さあこれから説法するぞ」というときには、もう数えることができない人々が縁になっているのだと。

■人に依らず、真理それ自身に依る

安田先生は、人に依りかかってはならない、法に依れと。法、ダルマ、真理そのものに依れと、そのような大乘仏教の教えの大事なところを繰り返しおっしゃってくださっていました。人は有限である。人は凡夫である。人が触れた真理、その真理それ自身に依るのだと。

私がこの仏法の教えを学びはじめた昭和30年代のころには、まだ清沢先生の門下の方々が何人か生きておられた。それが、昭和46年に曾我先生が亡くなる。それから5年後には金子先生が亡くなる。安田先生が信頼していた信国^{のぶくにあつし}淳という方も亡くなるということが続いていったときに、私は、これはどうなるのだろうという不安感、何だか寂しいという感じがしたものですから、安田先生にお目にかかったときに、「仏法を生きてくださった方々がどんどん亡くなってしまって、寂しいですね」と申し上げたら、「馬鹿もん」と怒られました。「お前は何を求めているのだ」と。まったく頼りない教えの聞き方だ、と言うわけです。

もちろん、人が法に触れて法を生きてくださり法を証明するわけですが、後から行くものは、その人を自分の依り処にしてしまいがちなのです。それを、「善知識だのみ」と批判されるのです。人を自分の依り処にしてしまう。そうすると、その人が亡くなればもうお手上げです。そうではなくて、その人が生きている真理を求めるべきである。法を所有している人はいないのだと。

釈尊でも法を所有したわけではない。自分が見いだした法を、こういう法によって自分は闇を乗り越えられた、この法を信じてほしいということで、教えに説かれた。そういう意味で法を教えるべく、道理を教えるべく説かれた経典が『無量寿経』です。ですから、その『無量寿経』では諸仏が阿弥陀を称歎する、ほめるという形で願いが説かれていると思うのです。

親鸞仏教センターの動き

(2016年11月～2017年1月) 一抄一

■ 2016年

- 11/2 第193回英訳『教行信証』研究会
- 11/8 第96回(通算第147回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 11/11 ご命日のつどい
第54回現代と親鸞の研究会「〈生まれる〉ことをめぐる倫理学のために—〈誰〉かであることとその〈起源〉」明治学院大学社会学部教授:加藤秀一氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 11/14 第6回『『教行信証』と善導』研究会
- 11/21 第31回『西方指南抄』研究会
- 11/25 第12回 研究員と読む公開輪読会「Living Discourse on Buddhism—井上円了の『仏教活論』と仏教近代化の諸問題」担当:長谷川研究員① 11/25②12/2③12/9④12/16(文京区・親鸞仏教センター)
- 11/28 第170回清沢満之研究会
- 11/29 第194回英訳『教行信証』研究会「Suzuki Daisetsu's Presentation of Buddhism to the West」マールブルク大学名誉教授:マイケル・バイ氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 12/5 第97回(通算第148回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 12/8 平成28年度西山学会研究発表大会(京都西山短期大学):中村研究員発表「『法然聖人御説法事』から見る「宗」と「血脈相承」の問題—『選択集』との異同に着目して—」
- 12/9 ご命日のつどい
- 12/12 「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクト「解釈の転換—私感:『教行信証』の近代」教学研究 所長:安富信哉氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 12/14 第7回『『教行信証』と善導』研究会
- 12/20 第195回英訳『教行信証』研究会
- 12/21 第32回『西方指南抄』研究会
- 12/27 第171回清沢満之研究会
- 12/28 親鸞仏教センター報恩講

■ 2017年

- 1/6 第12回研究員と読む公開輪読会「唯信の生活—『唯信鈔文意』を読む—」担当:青柳研究員①1/6②1/13③1/20④1/27(文京区・親鸞仏教センター)
- 1/11 第196回英訳『教行信証』研究会
第98回(通算第149回)連続講座「親鸞思想の解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 1/13 ご命日のつどい
- 1/18 第8回『『教行信証』と善導』研究会
- 1/25 第33回『西方指南抄』研究会
第16回研究交流サロン「宗教と国家」中央大学 総合政策学部教授:保坂俊司氏(文京区・親鸞仏教センター)
- 1/31 第172回清沢満之研究会

掲載論文

- 12月 『印度學佛教學研究』第65巻第1号
中村研究員「證空における「化前序」説成立とその展開」

本研究会では、「現代とは何か」をテーマに、さまざまな分野でご活躍されている方々から、専門分野での課題とその苦闘を問題提起いただき、時代の課題と親鸞の思想・信念との接点を探っています。

第54回

〈生まれる〉ことをめぐる倫理学的のために — 〈誰〉かであることの〈起源〉 —

明治学院大学社会学部教授
加藤 秀一 氏



研究会の様子 於：親鸞仏教センター

「生まれる」とはそもそもどのようなことなのか、「いのち」という表現に内在する問題とは何か——などと生命倫理を根源から問うてきたのが加藤秀一氏である。加藤氏をお招きした「現代と親鸞の研究会」（2016年11月11日）では、「〈生まれる〉ことをめぐる倫理学的のために— 〈誰〉かであることの〈起源〉—」という講題のもと多角的な視点から問題提起をいただいた。ここにその一端を報告する。

（親鸞仏教センター研究員 中村玲太）

① 「生命／命／いのち」と「〈誰〉」

加藤氏は、「いのちが大切である、ということに反対するものではない」としたうえで、以下のような問題提起をされた。

「いのちが大切である」ということですからすべてが終わればこんな簡単な話はない。私は、「いのちが大切である」と言ったときに、実はそうした言説と現実との間に生じている亀裂を見ていきたい。

大切な人が死にゆくときに、本質的な問題は「命が失われる」ことなのだろうか、という問いをずっと考えています。かけがえのないその人がいなくなる、まさに〈誰〉かが失われるということが悲しいのではないか。「いのち」でも、「何者＝どんな人」かでもなく、その人が〈誰〉であるか、すなわち私との関係性における特異点であるかが本質的な価値なのではないか。

さて、「生命」とか「いのち」とか、いろいろな言い方で何かが表現されています。私たちが「生命」、「いのち」と言ったときに二つの相異なる極が含まれていると考えます。一つは、「かけがえのない命」という決まり文句がありますが、「個」の一回性を強調するような言葉です。さらに、これ

とは別のボキャブラリーもこの「生命」という言葉につなげて使われています。それが、「大いなる生命」などの言葉であり、「生命」が「つながり」、「連鎖」など、「全体性」を表すような語彙とも絡められる。この両極性が、私たちが「生命」と呼んでいる謎そのものを表しているのも、その両極性、両義性を常にたもって考えることが大事だと思うのです。

しかし、しばしば後者、「大いなるもの」としての命が言われ、前者の価値を下げるような言説が見られる。私としては、どちらの価値が高くどちらの価値が低いとか、どちらが先でどちらが後だとか、結論をつけようとする姿勢自体が毘だと思っています。この両極に引き裂かれている、ということ丸ごと受け入れるしかない。むしろ現状では、前者を強調する。それはあまりにも後者の「大いなるもの」が強調され過ぎているからです。

② 『ブレード・ランナー』の哲学

加藤氏は、議論を進める一つの軸として映画『ブレード・ランナー』（1982年、リドリー・スコット監督）に対して二つの問いを立てた。『ブレード・ランナー』の詳細は省くが、以下に登場する「レプリカント」とは、高度な生命工学によって製造された模造人間であり、人間に過酷な奴隷労働を強いられる存在である（外見上は人間と区別がつかない）。人間に反旗を翻したレプリカントを「廃棄」する任に当たったのが「ブレードランナー」である。

加藤氏が立てた問いは、（1）「レプリカントは、なぜ自分を生み出した人々に激しい憎しみと怒りを向けたのか？」、（2）「ロイ（レプリカント）はなぜ最終的にデッカード（ブレードランナー）を救ったのか？」である。これに対して、加藤氏は次の如く答える。

(1) に関してはある意味で簡単で、自分につらい生を与えた張本人だからでしょう。しかし、この場合に、「非同一性問題」が生じる。タイレル博士がレプリカントを生み出すという行為がなければ、自分はそもそも存在しなかったわけです。では、はたして博士にレプリカントは感謝しなければいけないのだろうか。奴隷であっても、自分を存在させるという恩恵を与えてくれたのだから。これが二番目の問いに関わる。

(2) に対しての私なりの答えですが、それは最後に生命というものを全面的に肯定したから、生命というものを抹消したくなかったからというものです。ただし、それは生命一般ではなく、自らの存在を丸ごと肯定した。ある意味では、この瞬間に模造人間が能力だけでなく、道徳性、倫理性においても人間を超えた。当然、奴隷として生み出された自分の生を呪った、否定したからこそ恨んだとしても、しかし、いったん生まれてしまえば、すべてが変わる。自分になるものを生み出すという計画を博士たちが立て、その思いどおりにレプリカントを作った。そのことは否定されるべきなのです。子どもを奴隷にするために作ってはいけません。しかし、それは生まれた自分の存在の否定にはまったくならない、という認識に到達した。いったん存在してしまえば、かけがえのない存在として肯定しうるものであり、それを生み出したものの意図とはまったく無関係に、肯定しうるのだという認識をつかんだのです。

『ブレード・ランナー』は、それが人間であるうがなかろうが（それはとるに足りないことだ）、一個の世界とともにある〈私〉の存在はかけがえのない（取り替え不能である）ということ、その価値を測るモノサシは、〈私〉という存在の外部にはありえないこと、を教えてくれる稀有の肯定的な物語だったのである。

③人間が生きて在ることにはらまれた矛盾

問題提起後の質疑では、「自分の存在を丸ごと肯定する」ということが、自らが置かれている境遇、社会的状況を単に受け入れることであれば、差別などの社会的問題への無関心にもつながりうるのではないか、という質問が出た。これに対して加藤氏は以下のように応答する。

常に超越している、というのはおかしいと思います。自分の人生を丸ごと肯定していれば、社会的な差別がどうしてもよくなる、ということになったらおかしい。そういう境地が当然であるかのように、自分の人生を肯定していればそれ以外の差別などはどうでもよい、と考える人が実際にいるわけであり、それは間違いだと言いたいからこそ『ブレード・ランナー』を出しました。それは、自らの存在を肯定した他方で、自分を作ったタイレル博士に憎しみをぶつけた（＝社会的差別状況への抵抗）、という両義性を指摘したつもりです。この両義性は、絶対に尊重しなければいけない。これは生命の問題とはまた別種の両義性であり、矛盾でもある。人間が生きて在ることにはらまれた矛盾、それが人間を成り立たせるような絶対的な条件としての矛盾です。そうした矛盾を保持すべきではないかと思っています。



加藤秀一 氏

※加藤氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第36号（2017年12月1日号）に掲載予定です。

加藤 秀一（かとう しゅういち）氏

明治学院大学社会学部教授

1963年東京都生まれ。一橋大学社会学部卒業、東京大学大学院社会学研究科Aコース単位取得退学。現在、明治学院大学社会学部教授。専攻は社会学、性現象論。著書に、『性現象論——差異とセクシュアリティの社会学』（劉草書房、1998年）、『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか——性道徳と優生思想の百年間』（筑摩書房、2004年）、『〈個〉からはじめる生命論』（日本放送出版協会、2007年）、『ジェンダー入門——知らないと恥ずかしい』（朝日新聞社、2006年）など。編著に、『自由への問い8 生——生存・生き方・生命』（岩波書店、2010年）など。

鈴木大拙のStrategyと、 その問題点

マールブルク大学名誉教授 マイケル・パイ 氏



マイケル・パイ 氏

以前も述べたように、2016年は鈴木大拙没後50年であった。大拙は各方面から、その功績を評価されているが、国際性がそこに含まれていることは言うまでもない。そこで、英訳『教行信証』研究会では、マールブルク大学名誉教授であり、国際宗教史学会会長であったマイケル・パイ先生をお迎えし、講義をいただいた。大拙が仏教をいかに西洋に伝えていったのかについて考察する、貴重な講義であった。2016年11月29日に“Suzuki Daisetsu's Presentation of Buddhism to the West”と題された講義の一部を紹介する。

(親鸞仏教センター嘱託研究員 田村晃徳)



■ 翻訳——何を伝えたいのか

鈴木大拙という方は、翻訳、そしてコミュニケーションの専門家でした。その生涯を通して、仏教的、そして真宗的な考えを広めていきました。

禅という言葉は大拙の影響でアメリカなど海外に知られてきました。翻訳するという作業は、自分の内面のことをより考えなければなりません。何を翻訳したいのか、というのが問題となるわけです。大拙は禅とはこのようなものである、ということだけを単に伝えたかったわけではありません。大拙も翻訳を通じて、自分のなかにある伝統の——禅宗にしる真宗にしる——何を伝えたいのかについて考えていたと思います。とてもおもしろいプロセスです。

また、私たちもそのような責任がある一人だと思ふのです。ですから大拙から習いつつ、その仕事を続けていきたいと思ふます。

■ エックハルトと禅

オリエンタリズム (Orientalism) という言葉があります。オリエンは東洋という意味です。そして、オリエンタリズムとは西洋から見た東洋のイメージ、それもある種歪んだイメージのことで、ここでは西洋人が自分の好みにあった東洋を、いわば作り出していると言えます。本当の東洋ではなく、自分の好きなイメージの東洋を描くのです。

一方でオキシデンタリズム (Occidentalism) という言葉もあります。これは東洋から見た西洋という意味です。日本人なら、日本人がどのように西洋を見ているかということです。大拙は西洋人を見て、西洋人について想像しました。西洋人が何を考えているかについては、大拙の書物にたくさん見いだすことができます。しかし、私は西洋人としてそれらを読むと、必ずしも正しいとは思いません。

エックハルトという思想家がいました。その思想は区別を超える経験を探していました。教義を言いだすと、いろいろなことを区別しなければいけません。例えば神、人間、罪、そして救いなどです。

しかし、宗教経験を深めると、そのような区別を超えていきます。禅から見ると、区別をしていくという見方がなくなっていけば、区別をすることが大切ではなくなります。その意味でエックハルトは禅で覚った人と似ているのではないかと大拙は論じました。

■大拙の西洋人観の問題点

問題は、大拙が西洋人に禅を説明したいと思うときは、西洋人の考え方は、それとは違うという思いがあったことです。西洋人はいろいろな区別をして考えると、その結果、科学が生まれました。しかし、そのような区別に囲まれることにより自由がなくなってしまうと大拙は思っていました。

それに対して、禅のほうから見れば区別がなくなり、区別を超えていくというわけです。そのようなメッセージを出しました。そのような主張は、彼の著作によく述べられています。西洋人の考え方は根本的に間違っていると教えました。しかし、そうなる西洋人には禅はわかるのか、という問題になっていきます。それは鈴木大拙の思想の問題点だと思います。大拙は西洋人にもいろいろな考え方があることを知っておいたほうが良かったと思います。東洋人は論理的ではない。また、西洋人は合理的で覚りを得ることはできないという極端な見方はダメだと思います。

■大拙の strategy

それでは英訳『教行信証』について、少し話していきましょう。鈴木大拙がもともと翻訳した文章は、少し問題があったそうです。あまり使用されなかった訳語が用いられていたそうです。大拙の strategy (戦略) としては、西洋の概念を受け入れて、そのうえで、それを使って翻訳をすることでした。委員会を作ると、議論をすることになります。しかし鈴木大拙は、翻訳委員会などは作らずに、一人で独創的に翻訳をしていました。

「本願」と「行」をどのように翻訳するかが問題です。「本願」は、伝統的に“Original Vow”と翻訳されてきました。大拙は“Original Prayer”にしました。西洋人は菩薩が修行して、やがて仏になっていくという、大乘の菩薩の考え方がわかりませんから、Vow もわかりません。ですから、西洋人でもわかる Prayer にしました。しかし、そこには問題があると思います。

■「本願」= Prayer の問題点

本願を Prayer に訳すると、少し広すぎます。またキリスト教の Prayer と少し違います。Prayer には神に対して「～してください」という願いの意味もありますが、また「神と一緒にいる」ことを感じるという意味もあるのです。神の滞在を感じる、silent prayer と呼ばれる祈りです。外への祈りと同時に、自分の内面へと感じる祈りもあるのです。中から感じる祈りは、念仏を聞くという感じではないかと思えます。それは、私たちが祈るのではなく、聖霊が私たちの代わりに祈るということです。

大拙が Prayer と訳してしまうと、何を指しているのかがわからなくなるのです。

ですから、“Original Vow”のほうが良いと思います。西洋人に対して翻訳したいと思って、一つの単語を用いることは失敗すると私は思います。

※マイケル・パイ氏の問題提起と質疑は、『現代と親鸞』第36号(2017年12月1日号)に掲載予定です。



英訳『教行信証』研究会 於：親鸞仏教センター

マイケル・パイ (Michael Pye) 氏

マールブルク大学名誉教授

1939年イギリス生まれ。ケンブリッジ大学クレア・カレッジで現代語学と神学を学ぶ。1961～1966年日本で教職。ランカスター大学、リーズ大学での宗教学講師を経て1982～2004年マールブルク大学宗教学教授。退官後、2005～2008年大谷大学客員教授。国際宗教史学会事務局長、同会長を歴任。仏教、神道及び比較宗教学の調査研究・執筆活動を続ける。The Eastern Buddhist 編集長。

共著に、『仏教とキリスト教の対話』〈I～III〉(2000～2004年、法藏館)など。

「近現代『教行信証』研究」

検証プロジェクト 立ち上げ

親鸞の主著である『顕浄土真実教行証文類』（以下『教行信証』）の思想研究は、現在に至るまで多くの優れた成果が報告されている。また2011年の宗祖親鸞聖人750回御遠忌に際しては、親鸞直筆の『教行信証』である坂東本が翻刻・出版された。これは坂東本の書誌研究における、1つの到達点であると言えるだろう。しかしながら、これらの成果を総合し検証する作業は、まだ十分に進んでいないのが現状である。

そこで親鸞仏教センターでは、所長の本多弘之をリーダーに、青柳英司親鸞仏教センター研究員、名和達宣教学研究所研究員、藤原智大谷大学真宗総合研究所東京分室PD研究員をメンバーとして、「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクトを立ち上げた。特に初年度においては、『教行信証』本文の研究検証へ入る準備段階として、読解の視座や造意、構造等の研究を進めている。その一環として2016年12月12日には、教学研究所所長・安富信哉氏を講師に迎え、研究会を開催した。氏は真宗大谷派の安居において二度『教行信証』を講じており、また曾我量深・金子大榮・鈴木大拙の3人を中心に、近現代における『教行信証』研究の軌跡を尋ねている。研究会当日は「解釈の転換—私感：『教行信証』の近代」という講題のもと、問題提起をいただいた。ここに、その一端を報告する。

（親鸞仏教センター研究員 青柳英司）

はじめに

近代以降、親鸞の思想として一般に流布したのは『歎異抄』であった。しかし『歎異抄』は、親鸞自身の著作ではない。むしろ親鸞思想を考える場合、中心とすべきは主著の『教行信証』である。では近代において『教行信証』はいかに研究され、受容されてきたのだろうか。この問題に対して安富氏は4つのテーマを挙げ、それぞれに「近世的了解」と、そこからの「基軸の転換」、その後の「解釈学的展開」を示された。

1. 真理論

仏教は真理を、「真俗二諦」として語ることがある。ただ近世以降の真宗教団では、この「真俗二諦」を世間や国家への迎合を正当化する言葉として用いてきた。果ては「二諦相依」こそ、真宗の「宗義」であるという主張すら見られたのである。

この流れを転換したのが、清沢満之だった。清沢は、われわれが帰すべきは何よりも親鸞であ

り、親鸞が明らかにした「本願他力」であると見定めたのである。この「本願他力」こそ真宗の「宗義」であり、われわれは、そこにおいて自己の信念を確立すべきである、と清沢は考えたのであった。そして、親鸞が「本願他力」を明らかにした書物こそ『教行信証』であり、われわれが依るべきは世俗の価値観や教団の権威ではなく、『教行信証』の思想であることを明確に示したのである。

また、三木清は親鸞を理解するにあたって、『教行信証』を「真理の書」と位置づけた。ここには近代における、解釈学的展開があろう。親鸞が求めたものは「この現実の自己を救う真理」であったと三木は述べ、『教行信証』の中心概念も「真理」に他ならないと見定めている。この慧眼は、評価されるべきだろう。

2. 歴史論

近世の真宗教団において歴史観は、消極的にしか論じられてこなかった。もちろん末法史観について言及されることはあったが、単なる衰退史観として把握されるのみで、そこから積極的な意味を読み取ろうとする姿勢は看取できない。

この流れを転換したのは、曾我量深と松原祐善であろう。曾我は、仏教史を釈尊からではなく、阿弥陀仏の回向から始まるものとしてとらえ直した。また、松原は末法を生きているという危機意識が親鸞において、本願へ帰入する重要な契機になったことを明かしている。すなわち曾我は、仏教史を本願史観に立って再構築したのであり、松原は末法史観の信仰的意義を明らかにしたと言えるだろう。

さらに、解釈学的な展開としては、三木清の理解が重要である。三木は、正像末の歴史観を単なる衰退史観とは見なさず、浄土教の真実義が次第に開顕される過程であると見る。つまり、親鸞において仏教史とは、正像末を通して人間悪が浮き彫りになる過程であり、同時に七高僧が次々に現れて浄土教を明らかにした伝統であった。親鸞にとって浄土真宗に帰するという事は、歴史的必然だったのである。

3. 構造論

近世の宗学者たちは『教行信証』を構造的に解

明するため、綿密な科文を作ってきた。この営みには学ぶべき点が多い。しかし『教行信証』の理解を固定化するという弊害も大きかった。

これに対して、従来の宗学にとらわれない新しい構造理解を示したのが、曾我量深と金子大榮である。曾我は『教行信証』の前二巻を「伝承の巻」、後四巻を「已証の巻」に分ける説を提示し、金子は前四巻を「回向の巻」、後二巻を「摂化の巻」とする理解を示している。両者に共通するのは、前五巻を「真実の巻」として重視し、後一巻を「方便の巻」として軽んずる近世的了解をあらためようとした点である。これは『教行信証』のなかに一貫する親鸞の内面性を読み取ろうとする試みでもあろう。

さらに近年では、「化身土巻」こそが『教行信証』の結論であるという理解も提出されている。ここには曾我・金子の研究からの、解釈学的展開を見ることができよう。ただ、これらの構造論も拘泥しすぎると、近世宗学のように『教行信証』の理解を固定化させることにもなる。親鸞の信仰が動的である以上、『教行信証』の読み方も動的であるべきであろう。

4. 方法論

近世の大谷派の学寮における講義の中心は、『浄土文類聚鈔』や『教行信証大意』であり、『教行信証』そのものではなかった。『教行信証』は一派の基軸となる聖教として、自由な解釈が制限されていたのである。

しかし、明治に入って宗学も近代化を求められるなかで、いくつかの転換を見ることとなった。例えば『教行信証』の真蹟^{せき}確定を導いた「歴史実証主義」の導入や、自己を通してものを言う「実験主義」の提唱が挙げられる。特に、後者は清沢満之によって強調され、近代真宗学の基本的態度となっていった。

さらに、清沢門下である金子大榮は、これを「聞思」という言葉で押さえ直している。ここには、解釈学的展開が見て取れる。金子は、真宗学を「聞思」の学と呼び、聞法と思惟という円環のなかに、限らない学の営みがあることを明らかにしたのである。これら一連の展開は、実証できないことをできるかのように語り、教団の権威で反

論を封殺した近世宗学との、決別を意味するものだろう。

おわりに

安富氏は近世宗学の問題の本質を、1つの理解に権威を与え、固定化するという点に見いだされた。これに対して、氏が近代真宗学への転回点とされたのは、どこまでも自己の問題を通して教法を問いつける姿勢であったように思う。それは常に教法を新しい言葉によってとらえ直し、世界に発信するという営みを含意するものであろう。本プロジェクトにおける『教行信証』の読解も、この点を忘れることなく、丹念に親鸞の信仰と課題を聞き取っていききたい。



安富信哉 氏

安富 信哉 (やすとみ しんや) 氏 教学研究所長

1944年新潟県生まれ。早稲田大学第一文学部英文学専修卒業。大谷大学大学院博士課程真宗学専攻単位取得退学。ウイスコンシン州立大学(マディソン校)仏教学客員研究員、大谷大学真宗学科教授、同特別任用教授などを歴任。現在、真宗大谷派教学研究所長。真宗大谷派講師。大谷大学名誉教授。真宗大谷派光濟寺住職。東方仏教協会(EBS)事務局長。

著書に、『親鸞と危機意識』(文栄堂書店、1991年・新訂増補、2005年)、『清沢満之と個の思想』(法藏館、1999年)、『『教行信証』への序論——総序を読む——』(東本願寺出版、1999年)、『『選択本願念仏集』私記』(東本願寺出版、2003年)、『親鸞・信の構造』(法藏館、2004年)、『真実信の開頭——『教行信証』「信巻」講究——』(東本願寺出版、2007年)、『『唯信鈔』講義』(大法輪閣、2007年)、『聞——私の真宗学——』(文栄堂書店、2009年)、シリーズ親鸞第9巻『近代日本と親鸞——信の再生——』(筑摩書房、2010年)、『親鸞・信の教相』(法藏館、2012年)など。編著に、『清沢満之——その人と思想』(法藏館、2002年〔共編〕)、*Rennyō and the Roots of Modern Japanese Buddhism* (オックスフォード大学出版、2006年〔共編〕)、『清沢満之集』(岩波書店、2012年)など。

りせず、真実の信心に目覚めた人を常に照らし出してくださるというので
す。「照らす」とは、かの仏の心がおさめ取ってくださいさるのだと。「仏心光」
とはつまり、個々のありようを超えて、阿弥陀の心のうちにおさめ取って
くださることだとよくよく心得るべきなのです。「是人」とは、信心を得た人の
こと。常に護ってくださいさる、とは、どれほど恐ろしい「魔」に襲われようと
どれだけ深刻な「悪」にさらされようと、信心を得た者が無明の「闇」に飲
み込まれてしまうことは決してないということ。それもこれも、阿弥陀が
「撰護不捨」してくださるからです。「撰護不捨」とは、阿弥陀の心のうち
におさめ取り、護つて、絶対に見捨てることがない、ということです。

原文

また曰わく、「言護念増上縁者 乃至 但有專念 阿弥陀仏衆生 彼仏
心光 常照是人 撰護不捨 總不論照撰 余雜業行者 此亦是 現
生護念増上縁」(觀念法門) 文

「言護念増上縁者」というのは、まことの心をえたる人をこのよにてつねに
まもりたまうともうすことばなり。「但有專念 阿弥陀仏衆生」というのは、ひ
とすじにふたごころなく弥陀仏を念じたてまつるともうすなり。「彼仏心光
常照是人」というのは、彼はかのという。仏心光は無碍光仏の御こころともう
すなり。常照は、つねにてらすともうす。つねにといふは、ときをきらわず、
日をへだてず、ところをわかず、まことの信心ある人をばつねにてらしたま
うとなり。てらすといふは、かの仏心のおさめとりたまうとなり。仏心光は、
すなわち阿弥陀仏の御こころにおさめたまうとしるべし。是人は、信心をえ
たる人なり。つねにまもりたまうともうすは、天魔波旬にやぶられず、悪鬼
悪神にみだられず、撰護不捨したまうゆえなり。「撰護不捨」といふは、おさ
めまもりてすてずとなり。

(『真宗聖典』五二二―五二三頁)

■「護」の言は、阿弥陀仏果成の正意を
顯すなり、また撰取不捨を形すの貌
なり、すなわちこれ現生護念なり。
(四五六頁「愚秃鈔」)

◆ひとすじにふたごころなく阿弥
陀仏を念じたてまつる

■『經』に「聞」と言は、衆生、仏願
の生起・本末を聞きて疑心あることな
し。これを「聞」と曰うなり。「信心」と
言は、すなわち本願力回向の信心な
り。「歡喜」と言は、身心の悦予の貌を
形すなり。「乃至」と言は、多少を撰
するの言なり。「一念」と言は、信心
二心なきがゆえに「一念」と曰う。これ
を「一心」と名づく。一心はすなわち清
淨報土の真因なり。(二四〇頁「信卷」)

■「念」は如来の御ちかいをふたごころ
なく信ずるをいうなり。
(五四四頁「二念多念文意」)

■「專復專」といふは、はじめの「專」
は、一行を修すべしとなり。「復」は、ま
たという、かさぬという。しかれば、ま
た「專」といふは、一心なれとなり。一
行一心をもつばならなれとなり。「專」は、
一ということばなり。もつばらという
は、ふたごころなかれとなり。ともかく
もうつるごころなきを「專」といふなり。

り。仏光円頂といふは、仏心をしてあき
らかに信心の人のいただきをつねにてら
したまうとほめたまいたるなり。これは
撰取したまうゆえなりとしるべし。
(五二六頁「源空銘文」)

◆天魔波旬にやぶられず、悪鬼悪
神にみだられず

■『入法界品』に言わく、「たとえば人
ありて不可壊の葉を得れば、一切の怨敵
その便りを得ざるがごとし。菩薩摩訶薩
もまたかくのごとし。菩提心不可壊の法
葉を得れば、一切の煩惱・諸魔・怨敵、
壊ることあたわざるところなり。たとえ
ば人ありて住水宝珠を得てその身に嬰珞
とすれば、深き水中に入りて没溺せざ
るがごとし。菩提心の住水宝珠を得れ
ば、生死海に入りて沈没せず。たとえは
金剛は百千劫において水中に処して、爛
壊した異変なきがごとし。菩提の心も
またかくのごとし。無量劫において生死
の中・もろもろの煩惱業に処するに、断
滅することあたわず、また損減なし」と。
(二二三頁「信卷」『往生要集』)

「善導大師の銘文」(五)

念仏は、「この現実」に何をもちたらすのか。それによつて私たちは何を心得るのか。この問題を親鸞は、「念仏すれば」ではなく、「信じる人は」と読み替える。

「何をなしたか」ではなく、「何がいただけたのか」。自己は、世界はいつたいたいのよなものとしてあるのか。己を規定する尺度によつて、生活することそのものの意味はまったく異なる。ここで言う、本願力が護ってくれる、とは、根源的な何ものが私たちの人生を貫き、駆り立てるということ。不都合や不幸が起らない、苦惱に苛まれない、というのではなく、個々の歩みがそうした善し悪しの彼岸から突き動かされる。行為の個性性を破つて、私たちを超えたところから、私たち自身の問題となるのだ。

〇〇すると、私たちにはいったいどんな「善い」ことがあるのか、あるいはどんな「悪い」結果を生むのか。私たちの日常は、この問いと答えの複雑な絡み合いだ。この思考は私たちの身に染みついて、離れない。仏教はここに、人間の執着心、迷いそのものの根を見た。親鸞はここに、阿弥陀が必ず護ると誓つ、自分たちの姿を見る。

(元研究員 内記洗)

現代語

「言護念増上縁者」とは、真実の信心が芽生えた人を、この世界のただなかで常に護つてくださる、という言葉です。「但有専念 阿弥陀仏衆生」と

は、念仏において、ただ阿弥陀の心をいたたく人は、というのです。「ああでもない、こうでもない」と絶えず揺れ動くこの身に、ただひとつ、阿弥陀の願いを受け取って生きるのです。「彼仏心光 常照是人」というのは、「彼はかの、ということ、「仏心光」は「無碍光仏」という、「光」である如来の心です。「常照」ですから、その心は常に照らすのです。「常に」とは、不浄のときを嫌ったり、臨終まで先送りしたり、特別な場所や立場を選び分けた

《参考》(ページはすべて『真宗聖典』)

◆まことの心をえたる人をこのよにてつねにまもりたまう

■問うて曰わく、阿弥陀仏を称念し礼観して、現世にいかなる功德利益かあるや。答えて曰わく、もし阿弥陀仏を称すること一声するに、すなわちよく八十億劫の生死の重罪を除滅す。礼念已下もまたかくのごとし。『十往生経』に云わく、「もし衆生ありて、阿弥陀仏を念じて往生を願すれば、かの仏すなわち二十五菩薩を遣わして行者を擁護して、もしは行、もしは座、もしは住、もしは臥、もしは昼、もしは夜、一切時・一切処に、悪鬼悪神をしてその便を得しめざるなり。』また『観経』に云うがごとし、「もし阿弥陀仏を称礼念してかの国に往生せんと願えば、かの仏、すなわち無数の化仏・無数の化観音・勢至菩薩を遣わして、行者を護念したまう。』また前の二十五菩薩等と、百重千重、行者を囲遶して、行住坐臥、一切時処、もしは昼、もしは夜を問わず、常に行者を離れたまわす。いますでにこの勝益まします、憑むべし。願わくはもろもろの行者、おのおの至心を須いて往くことを求めよ。

(一七五頁「行巻」『往生礼讃』)

この一行一心なるひとを撰取してすたまわざれば、阿弥陀となづけたてまつると、光明寺の和尚は、のたまえり。この一心は、横超の信心なり。

(五五五頁『唯信鈔文意』)

◆仏心光 / 無碍光仏の御まごころ / つねにてらしたまう

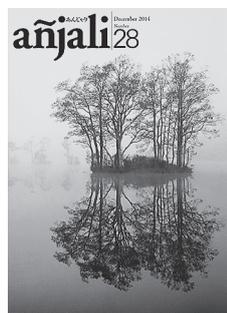
■撰取の心光、常に照護したまう。すदैによく無明の闇を破すといえども、貪愛・瞋憎の雲霧、常に真信心の天に覆えり。たとえば、日光の雲霧に覆われるれども、雲霧の下、明らかにして聞きことなきがごとし。

(二〇四〜二〇五頁「正信偈」)

■「信珠在心」というのは、金剛の信心をめでたきたまにたとえたまう。信心のたまをこころにえたる人は、生死のやみにまどわざるゆえに、「心照迷境」というなり。信心のたまをもつて愚痴のやみをはらいあきらかにてらすとなり。「疑雲永晴」というのは、疑雲は願力をうたがうこころをくもにたとえたるなり。永晴というは、うたがうこころのくもをながくはらしぬれば、安楽浄土へかならずまゐるなり。無碍光仏の撰取不捨の心光をもつて信心をえたる人をつねにてらし、まもりたまうゆえに、「仏光円頂」とい

『アンジャリ』バックナンバーのご紹介

『アンジャリ』は、経済、思想、教育など専門分野で活躍される方々に現代の課題とその苦闘をご執筆いただき、21世紀の確かな時代の方向を探る情報誌です。なお、「アンジャリ」は、古代インドのサンスクリット語で「合掌」を意味する言葉です。



第28号

下田正弘氏 東京大学文学部教授 他



第29号

吉村萬吉氏 作家 他



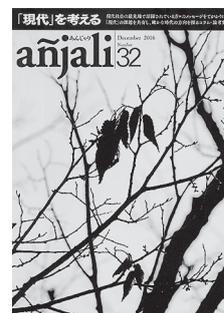
第30号

大峯顯氏 大阪大学名誉教授 他



第31号

山極寿一氏 京都大学総長、京都大学大学院理学研究科教授 他



第32号

桃井和馬氏 写真家、ノンフィクション作家 他

※お申込みをお待ちしております（各500円・送料込み）。

「アンジャリの会」にご入会いただきますと、親鸞仏教センターの発行物をご自宅にお届けします。

年会費1,000円（送料込）で、『アンジャリ』（年2回）と機関紙『親鸞仏教センター通信』（年4回）をご自宅にお届けします。ぜひご入会ください。知人や友人等のご紹介もお受けします。

■申し込みと問い合わせは、
親鸞仏教センター内「アンジャリの会」係
TEL 03-3814-4900
FAX 03-3814-4901
E-mail shinran-bc@higashihonganji.or.jp まで。

リレーコラム

「近代教学の足跡を尋ねて」第10回 (東京帝国大学)

明治20（1887）年、清沢満之は、宗教哲学を修めるために新設されたばかりの東京帝大大学院に進学した。わけても俊英と知られた満之だが、翌21（1888）年、東本願寺の要請で京都府立尋常中学の校長に転ずることとなり、決然として大学院を去る。このとき満之は「縁ありて真宗の寺門に入り、本山の教育を受けて今日に至りたるもの、この点に於て予は篤く本山の恩を思い、之れが報恩の道を尽くさざるべからず」と語っていたという。

そして明治25（1892）年、東大選科へ進んだのは鈴木大拙である。カントやヘーゲルを学んだとはいうものの、約三年の在籍期間の多くを鎌倉円覚寺での参禅に費やしている。その親友・西田幾多郎も、冷遇される選科生暮らしの一方で円覚寺に参禅している。その西田が当時を回顧した一句は、学問に自足せず求道的であり続けた満之や大拙とも共通した信念を語っているように思われる。曰く、「内に自ら楽しむものがあつた。超然として自ら矜持する所のものを有っていた」——。（飯島）



現在の東京大学文学部

行事日程のご案内

■親鸞思想の解明

日時：2017年3月6日（月）18時30分～20時30分
4月 休 講
5月9日（火）18時30分～20時30分
会場：東京国際フォーラム ガラス棟（G棟）

■ご命日のつどい（毎月第2金曜日）

日時：2017年3月10日（金）10時～11時30分
4月14日（金）10時～11時30分
5月12日（金）10時～11時30分
会場：親鸞仏教センター 3階 仏間

上記共に、事前申込み不要・無料です。

あとがき

センターの願いであった当地への移転開所からまもなく一年が経とうとしている。これまで取り組んできた課題のさらなる充実と広がりを願いとし、センターを会場に行えるものはセンターで行い、また関係機関の会場としても機能し始めてきた。加えて大谷大学真宗総合研究所東京分室も当所で同様に歩み出しており、今年度は研究課題の新たな取り組みとして、紙面に掲載したとおり本多所長をリーダーとしてセンター研究員、真総研分室研究員、本山教学研究員をメンバーとする「近現代『教行信証』研究」検証プロジェクトを立ち上げ、学事に関わる三機関による新たな歩みが始まった。センター開所の当初の願いを大切にこれからも携わっていければと思う。（橘）